

石部宿について（2）～昔の石部宿はこんなところ～

引き続き石部宿についてご紹介します。仕事や旅で行き交う人の安全な旅路をサポートするのが宿場町の役割ですが、江戸時代当時はどんな町並みだったのでしょうか。

石部宿のようす

「新修石部町史」より



図は文久2年（1862）当時の石部宿の町並みを復元したものです。（細かいので拡大してご覧ください）東海道沿いにたくさんの建物が並んでいます。またお寺や神社、左端の直角に2回曲がる道路（鍵の手状の地形）は今でも残っています。

中央の赤丸部分は現在でいう石部中央の交差点ですが、ここには「^{こうまつば}高札場」「^{といやば}問屋場」がありました。高札場は決まり事や禁止事項などを書いた札が貼りだされる場所、問屋場は宿場町の運營業務などを行う役人の詰所です。

現在の石部中央交差点。江戸時代は町の中心部でした

建物には以下のような種類があります。

農家：図の緑色の建物で、一般の住居。畑仕事のため牛を飼う家も多かった。

商家：図の紫色の建物で、商売を営む家。食料品や調味料の店、小間物屋（化粧品や装身具）や傘屋といった日用雑貨の店など種類は多岐にわたる。

^{はたご}**旅籠**：図のピンク色の建物で、旅人が寝泊まり



する旅館。飯盛女^{めしもりおんな}と呼ばれる女性従業員が食事を用意してくれるところもあった。食事が
ない素泊まりのみの宿は木賃宿^{きちんやど}といった。

本陣：幕府関係者や公卿^{くげ}、大名といった地位の高い人物が主に利用する大きな宿。石部宿には**小**

島本陣、**三大寺本陣**^{さんだいじ}ⁱⁱの2軒が存在。

現在の石部宿

さて、ここまで江戸時代の石部の姿をさっと紹介しました。地図で見るとわかりやすいですが、地形や寺社などは今も変わらず残っています。石部地域の旧東海道筋は「湖南市景観計画」で重点地区に定められ、開発を行う際には古き良き景観を損なわないよう注意しています。

また、雨山文化運動公園には、江戸時代の建物（上記の農家、旅籠など）を再現した「宿場の里」、宿場や東海道関係の資料を展示する「歴史民俗資料館」があり、当時の石部宿の姿を後世に残すよう努めています。建物の中にも入るので、タイムスリップ気分を味わえるかも…春には桜がきれいに咲くので、ぜひお立ち寄りください。



宿場の里（雨山文化運動公園内）

【参考文献】

- ・石部町「新修石部町史」1988
- ・八杉淳「近江の宿場町」2009

ⁱ 町の出入口がカクカク曲がっていることで見通しが悪くなる。外から来た人がむやみに内部を覗けないため、防犯の役割を果たす地形となる。東西に置かれた「見附」には門番も立っていた。

ⁱⁱ 三大寺本陣は残念ながら資料があまり残っていないが、小島本陣は宿帳（宿泊記録）が現存し、徳川家の将軍（14代家茂、15代慶喜）や新選組の近藤勇が利用したことが記されている。